

「無条件に生かされる命」

別院住職 釋宣弘

坊守^{ぼうもり}の妊娠が分かったある日、住職からお腹の子はお前たちの子ではないぞと言われ、坊守は何のことかと思ったそうだ。だが、その言葉に続いてお腹の子は佛様から与った命、大切に育てなさいと仰ってくださったと感動し、そうだったねと私に話してくれた。

生まれてくる子供の名前にはずいぶん悩んだ。性別はあえて聞かなかったが、周りの方々はお腹が前に出ているから男の子だとか、坊守の顔つきが優しくなったから女の子じゃないかななどと言ってくくださったのだが、ある日のエコー検査で先生が「ん？あるな」と漏らした一言がきっかけで、坊守はすっかり男の子だと思い込んでしまったようだ。その日から男の子の名前を幾つも幾つも考えた。こんな名前はどうかろう。こんな名前はどうかろうと日常で触れる様々なことが名前と結びつく。夫婦でいつもそんな話をしている何とも楽しい日々であった。

そして迎えた平成24年11月4日の朝、30時間に及んだ難産の末、娘は元気な泣き声と共に生まれてきた。産まれてきた子を見た瞬間、男の子の目印がついていないと吃驚したがそんなことよりもただただ嬉しくて涙が止まらなくなり、頑張った坊守や取り上げてくださった先生や助産師さんに何度もお礼を言っていたら、邪魔だから出ていてくださいと言われてたりしたのも今ではいい思い出である。

しかしただ嬉しいだけではなく考えさせられることもあった。それは、性別に関して皆さん思い思いのことを言ってくくださった後、大抵の方が男の子でも女の子でもどちらでも五体満足なら良いねと言ってくくださった。しかしその言葉にふと疑問が起こり、命について考えさせられたのだ。それは人間という存在は五体満足じゃなきゃ駄目なのか、私たちは産まれてくる命にも条件を付けなきゃならないのか。産まれてくる命に無条件で感動できないのか。阿弥陀如来はすべての者を救うと誓ってくださっている。それは無条件と言うことである。私たちは何事をも自分の価値基準で善し悪しを決め、時には自分自身をも肯定したり否定したりしてしまう。そんな私たちを無条件で認めてくださる存在があるだけで安心して「今」「私」を生きられる。それこそが念佛を宗として生きるということだと気づかせてい



ただいた。そして長女にはどんな存在をも尊重し、自分の存在にも感動できる人になって欲しいと願い十和子と命名させていただいた。

また平成26年10月27日に次女を授かる。この時もやはり大半の方から同じような言葉をかけていただいたが、長女の時に念佛の御教えを深めさせていただいたお陰で、念佛を宗とした一つの尊い命を生ききって欲しいと願い惟紗と命名させていただいた。

娘たちが産まれるまでは「父は照り母は涙の露となり、同じ慧に育つ撫子」このように考え父は厳しく母は優しく育てようと思っはいたが、今現在、十和子は2歳5ヶ月に惟紗は5ヶ月になるが溺愛とはよく言ったもので、娘たちが可愛くて仕方がない。兎にも角にも可愛いものである。しかしそれで良いと最近は思っもいる。幼少の頃はたくさんの方々の愛情で育てていただき、受けたご恩はいつの日か必ず有縁の方々に振り向けてくれると信じてやまないのだ。合掌

～会員の広場～

病気知らずだった主人が体調を崩し入退院を繰り返すようになってこの6～7年。経営していた小さい会社も不景気の影響をかぶり、息子が手伝っていますが内容は悪くなるばかり。主人の介護と会社の状態の心配。自分自身も心臓病を持ち、暗く深い谷底で光を求め「何とか私に出来ることがあるなら」と頑張っていました。悩みは大きくなるばかり。

そんなとき「永代経法要」の御案内をいただき、その冒頭に「悩むと言うことは、仏法聞けよの催促です」その「催促」の言葉が胸に突き刺さり、なんとしても行こう。行けば何か心を鎮めていただけることがあるかも・・・と始まる時間より早めに着き、お昼のお弁当を遣わせていただく場所を厚かましくも「婦人会お集まり」の末席をお借りしました。そこで「婦人会に入りませんか」のお声をいただき、「この際何でも受け止めてやらせていただこう」と即決心し入会させていただきました。

皆さんに、体の故障や悩みを抱えながら毎月決まった日に揃ってお勤めをし、明るく談笑することが出来る「幸せ」の有り難さを感じさせていただきました。

寺内に入り、お庭から本堂へ座り、心の落ち着きをいただき、御住職の法話も身の奥に深く浸みます。これまではお寺の法要行事にも足遠く不熱心で恥ずかしい思いが募ります。

普段は雑事に追われ日々潰す中、月の中一日きちんと決めて心を鎮め思いを改めさせていただく時が持てたことを大変有り難く思い、感謝しています。今後もどうぞよろしくご指導をお願いいたします。合掌

府川 眞弓

